

理性の擁護

今年の5月17日、アメリカの物理学者 Lawrence Krauss は『ニューヨーク・タイムズ』に「知性の介入」を主張する者たちを批判する記事を書き、進化論を擁護するためにカトリック教会の教えを援用した。これを機に、ウイーン大司教クリストフ・シェンボルン枢機卿は進化論のすべての理論がカトリックの教えと両立するわけではないこと釘を刺した（New York Times, 2005年7月7日）。

* * * * *

「1996年にヨハネ・パウロ2世が進化論（この言葉の定義することなしに）『一つの仮説以上のもの』であるとして以来、新ダーウィン主義者たちは自己の主張をキリスト教の信仰と両立することを示そうとして、しばしばカトリック教会が進化論を認めた（少なくとも黙認した）と主張してきた。」しかし、このことは、ある種の生物が他の種の生物から生まれてきたとする一般的な意味での進化論についてであって、進化を「導きも計画も一切ない偶然と自然淘汰によるプロセス」とする新ダーウィン主義についてではない、とシェンボルン枢機卿は解説する。「カトリック教会は、地球の生命の歴史について多くの細かいことを科学に任せると同時に、人間は理性の力によって、生物界を含めた自然界に目的性と計画性があることをはっきりと確実に知ることができると宣言している。」「生物界の中の動きが一定の目的にむかっている（一定の法則にしたがっている；訳者注）という現象があることを否定するか、もしくは無視しようとする理論体系はすべてイデオロギーであって、科学とは呼べない。」

同枢機卿はヨハネ・パウロ2世が1996年以外にもこのテーマに様々な機会に触れられたことを指摘する。そして、特に1985年7月10日の一般謁見を引用する。ここでの発言は新ダーウィン主義者たちには引用されていないが、前教皇はそこでこう言う。「自然科学がその段階やメカニズムを明らかにしようとしているところの生物の進化は、それが何かの目的に向っている事実を示し、それを知るとき我々は驚嘆の念を禁じない。この目的性とは、生物を一定の方向に導くものだが、生物自体がその導きを指導しているのでも責任をもっているのでもない。それは生物界を創造されたお方を認めることを我々に強いる。」少し後で、前教皇はこう続ける。「創造主たる神の存在を『示す』これらの証拠全てに対し、ある人々はそれは偶然の力によるとか、物質が自ら進化のメカニズムを内包するという理屈を並べて抵抗する。これほど複雑な要素からなり、生物界において驚嘆するばかりの目的性をもつ宇宙が偶然にできたと主張することは、我々の目に現れる宇宙は説明不可能であると白旗を掲げるに等しい。事実、それは原因を持たない結果があると言うことになる。つまり、人間の理性に問題の解決を追求することをあきらめるよう強いることで、それは人間理性の敗退である。」また別の一般謁見（1986年3月5日）では、「天地万物が神に創造されたという信仰が、この宇宙は単なる偶然と必然性によって

物質が進化してきた結果であるとする唯物論哲学とは、まったく相容れないことは明らかである」と断言している。

これらの教えは『カトリック教会のカテキズム』の教えと同じであると枢機卿は教える。『カテキズム』は神の存在が人間理性によって知りえること(286番)と、この世界が「何かの必然、盲目的運命、または偶然によって現れたのではない」(295番)ことを教えている。

しかしながら、枢機卿は新ダーウィン主義者たち(具体的には Lawrence Krauss)は、全人類が共通の先祖から生まれてきたことをほのめかず、国際神学委員会の文書(『交わりと奉仕。神の似姿に創られた人間』、2004年7月23日)にある新教皇の言葉を引用して、ベネディクト16世を自分たちの賛同者の一人として紹介している。Krauss は言う。「ベネディクト16世はその当時委員会の議長であったが、カトリック教会は多くの生物学者が普通に使っている意味での進化論、つまり新ダーウィン主義と言い換えることが出来る理論をためらいなしに受け容れると結論した」と。しかし、同委員会の文書は自然界には計画性が存在することを主張するカトリック教会の伝統的教えを再確認している。さらに委員会は、1996年に進化論について言われたヨハネ・パウロ2世の書簡が広く誤解されていることに言及し、「ヨハネ・パウロ2世の書簡は、すべての進化論の理論を容認したものとは考えることができない。前教皇が排斥する理論には、宇宙の生命の発展において神の摂理がそれを導くこと明確に否定する新ダーウィン主義が含まれる」と念を押ししている。

ベネディクト16世の教えに関しては、枢機卿は次のことを思い出させる。「現教皇は、わずか二三週間前に行なわれた教皇の着座式の説教で、こう言われた。『私たちは偶然の進化の結果生まれた意味のない産物ではありません。一人一人が神の考えから生まれたのです。一人一人が好かれ、愛され、必要とされているのです。』」

シェンボルン枢機卿は結論する。「長い歴史の中で、教会はずっと信仰の諸真理を擁護してきた。(・・・)しかし、近代という時代には、教会は毅然として理性の擁護に立ち上がらねばならないという不可思議な状況に置かれている。(・・・)21世紀の初頭に、近代科学によって発見されたことだが、自然界には目的性と計画性があることを示す圧倒的な証拠を否定するために捏造された新ダーウィン主義や他の宇宙論を前にして、カトリック教会は再び人間理性を擁護し、自然界には明らかに計画性が存在することを宣言する。この計画性を『偶然と必然』の結果であるかのように説明を試みる理論は科学とは似ても似つかぬもので、まさにヨハネ・パウロ2世が言われたように、『人間理性の敗退』である」と。